

兄へ

ラジオネーム：よしのすけ

兄ちゃん、こうして一つ屋根の下で過ごすのは
何十年ぶりだろうね？

「便りがないのは生きてる証拠」なんて言い訳をしながら、
年末年始とお盆以外はあまり連絡を取っていなかったけど、
お互いもういい年だし、そろそろ「まさか」に備えなければと
思っていた矢先の、病院からの連絡。

買い物中に突然倒れて搬送され、何とか俺の名前と連絡先を
伝えて息を引き取った、と看護師さんから聞きました。

独身貴族のまま定年を迎え、北海道には戻らず、

最後の勤務地だった大阪を終の棲家にした兄ちゃん。

暮らしていたマンションに入るとき、「男の一人暮らしの家、
どんなに散らかっているのか」と覚悟して玄関を開けたけど、
思いのほかきれいに片付いていて、拍子抜けしました。

片付いている、というより最低限のものしかない、という
感じかな。若いころ一度だけ兄ちゃんのアパートに
泊めてもらったときは足の踏み場も無かったけど、

やっぱり60歳を過ぎて、いつか来るであろうこの日に
備えていたのかな、という気もします。

マンションの片づけをしている時、ご近所さんからいろいろな話しかけられたよ。

皆さん、兄ちゃんが亡くなったことにすごく驚いていただけ、兄ちゃんが近所付き合いをしっかりとっていたこと、管理組合の活動に積極的に参加していたことなど、教えてくれました。子供のころから礼儀正しくて、責任感のあった兄ちゃんの、姿そのままの様子でした。

コロナの影響で、知らない人とはあまりは話をしたくないであろう中、近所の皆さんは気さくに話しかけてくれました。これも、兄ちゃんが近所の方としっかりコミュニケーションをとっていたからだと思います。

こんな手紙を、今、兄ちゃんの骨壺を眺めながら書いています。暖かくなったら、父さんと母さんが待つお墓に納めに行くから、我が家でゆっくりにいつか読んでください。

リクエスト曲

＜ 岬めぐり ＞ / 山本コータローとウィークエンド ＜